コラム「きのうきょう」

学生記者　田中未来（文学部3年）

外側から見た白門祭

ことしの白門祭には行かないつもりだった。行く予定もなかったし、サークルに所属しているわけでもない自分には、この時期、関係のないことだった。

しかも、生命力に満ち溢れ、快活とした若者たちが集まる場所に行くには、それなりの勇気がいる。

想像する。ペデストリアンデッキ（学内遊歩道）に集まる大勢の若者たち。屋台で汗を流しながらフランクフルトを売る若者。中央ステージでギターをかき鳴らしながら頭を振る若者。

そしてまた自室でソファに寝転がりながら本を開く私も若者ではあるのだが、どうにも前述した人たちとは同じ人種に思えないのはこれまたいかに。

なんとなく近くにあった本を広げた私は次の瞬間驚きの声をあげる。

「あ！ 返却期限！」

2週間前に大学の図書館で借りた本だった。私の記憶が正しければ、本の返却期限はまさしく、きょうなのだ。

返却期限を超えてしまうと、確か1週間本を借りられないとかそういった罰則があったはず。

これは返しにいかないとまずい。この瞬間、私は白門祭（というか大学に、なのだが）へ向かう理由ができてしまった。

着いたのは午後6時過ぎだ。この時期の空はもう真っ暗。予想通り、屋台の販売などは終了していて、何とも殺風景だった。人もまばらで、屋台の解体作業をしている学生やイベントステージの近くでギターをケースにしまい、帰り支度をしている学生らがいる程度。私が恐怖し、おののいていた若者の喧騒（けんそう）はなく、少しだけ物悲しい気分になった。

祭りのあとの風景というのは、なぜこうも人をセンチメンタルな気分にさせるのだろうか。そんなことをぼんやり考えながら、思わず苦笑しそうになる。つくづく自分はこの祭りの当事者ではないことを実感したからだ。

きっと今、ギターケースを背負い、ボーカルと思われる女の子と並んで歩いている前髪の長いあの男の子は、当然ながら私のようなことは考えていないのだろう。

でも私は、この寂しい気持ちが不思議と嫌いではなかった。温かい気持ちにまでなっている。青春の最中を外から見るというのは、なんと贅沢なことか。白門祭って悪くないじゃん。気づかれない程度の鼻歌を歌いながら私は大学を後にした。